

# ews 뉴스레터

# 2003 Vol.3

# Letter

뉴스레터

九州大学韓国研究センター  
The Research Center for Korean Studies

## TOPICS

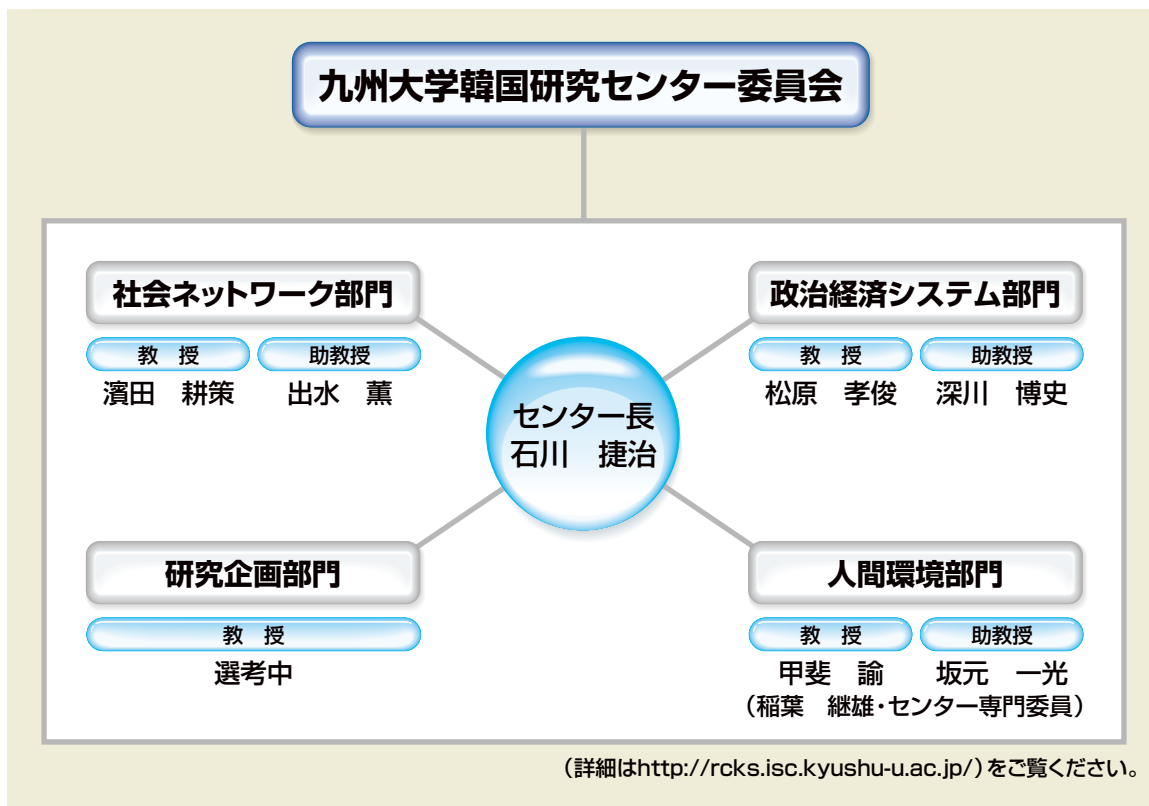
- 省令化された研究センター
- 第2回国際シンポジウム2002  
「日韓自由貿易協定が拓く未来  
～東アジア経済連携へのイニシアティブ～」
- 研究紹介
- 報告書紹介
- 2002年度語学研修報告
- 研究室だより
- ワールドカップ観戦記
- 研究ノート
- 近著紹介
- センター来訪者記録
- 寄贈図書リスト



訓民正音(第1張)

省令化された九州大学韓国研究センター	2
文部科学省令に基づく「学内共同教育研究施設」となって	石川 捷治 3
韓国研究センター主催シンポジウム	深川 博史 4
研究紹介1.「皮膚科教室における韓国との交流」	古江 増隆 6
研究紹介2.「先進的IT技術を用いた将来の日韓国際交流への挑戦」	岡村 耕二 7
報告書紹介『朝鮮半島から九州大学に学ぶ』	石川 捷治 8
2002年度 夏の語学研修	9
研究室だより	西野 玄 10
ワールドカップ観戦記	金 知炫 11
研究ノート『経学隊仗』の旅から	柴田 篤 12
近著紹介『市場開放下の韓国農業』	深川 博史 13
韓国研究センター関係の会議等及び主な来訪者	14
韓国研究センターに寄贈された韓国研究図書リスト	15
Information	16

## 省令化された九州大学韓国研究センター



# 文部科学省令に基づく 「学内共同教育研究施設」となって



九州大学韓国研究センター長  
石川 捷治

九州大学韓国研究センターは、国・公立大学における最初で唯一の「韓国研究」を正面から掲げた施設として、1999年(平成12年)12月に創設(学内措置)され、2000年1月に開所式を行いました。九州大学創立以来の歴史的伝統、朝鮮半島との地理的近さ、1998年11月の金鍾泌韓国国務総理の来学等が契機となっています。

創設以来3年が経過しました。その間、学内外の多くの方々からご指導とご支援をいただきました。韓国国際交流財団と福岡韓国商工会議所は、本センターの充実のための多大な研究支援をしてくださいました。心から御礼申し上げます。

本センターは2002年(平成14年)4月、文部科学省令に基づく「学内共同教育研究施設」となりました。平成14年度の概算要求において認められたものですが、4つの部門構成と専任教授(国際交流推進室副室長兼務)および客員教授(第Ⅲ種)の配置により、本センター発展の基礎が築かれました。

4つの部門は(1)社会ネットワーク (2)政治経済システム (3)人間環境 (4)研究企画です。

専任教授は近く着任予定ですが、客員教授には朴珍道〔パク ジンド〕(韓国・忠南大学校経商大学教授)氏が就任ご活躍中です。4部門には、各研究院から教授・助教授が併任として配置され、それぞれ共同研究に従事されています。

昨年は、「現代韓国朝鮮学会」が本センターを中心

に開催され、韓国国際交流財団理事長李仁浩〔イ インホ〕氏、駐日本国大韓民国特命全権大使趙世衡〔チョセヒョン〕氏をはじめ、大学関係者など韓国各界の多くの方々の本センターを訪問されました。これらにより韓国との学術交流がより深まったことは言うまでもありません。長期的展望に立った本来の意味での日韓共同研究も開始され、さらに今後の研究の展開に大きな可能性をひめた「玄海プロジェクト」による「光ファイバーネットワーク」(本センターと韓国各地を結ぶ)も現実化し、本センターと接続されました。

また省令化にともなって、センターの二階部分が増設され、専任教授室、客員教授室、訪問研究員室、共同研究室、センター長室、研究者交流室(研究会議室)が整備されました。

私たちセンター関係者は、内外の期待の大きさと責任の重さを痛感しています。今後ともいっそうのご指導・ご支援をお願い申し上げます。

## 九州大学韓国研究センター主催 第2回国際シンポジウム

# 全体テーマ 「日韓自由貿易協定が拓く未来」

## ～東アジア経済連携へのイニシアティブ～

## ① シンポジウムによせて

九州大学経済学研究院 深川 博史 (企画コーディネーター・討論司会)

2002年11月9日、九州大学国際ホールにおいて、韓国研究センター主催の、国際シンポジウム「日韓自由貿易協定が拓く未来 —東アジア経済連携へのイニシアティブ—」が開催された。本シンポジウムには、現代韓国朝鮮学会の共催、韓国国際交流財団の後援を得て、九州大学はもとより、国内の研究者をはじめ、官財界からアジア関係者が多数出席した。梶山千里九州大学総長の挨拶に続いて、日本側3人の基調講演が行われ、韓国からのコメンテータ2名も加わり活発な議



論が展開された。とくに韓国KIEP(対外経済政策研究院)金良姫氏のインターネット中継画面参加により、本シンポジウムは、ソウルと福岡を最新のITでつなぐという画期的なものとなった。これは、共催団体の九州大学研究拠点形成プロジェクト「先端的インターネット技術を用いた日韓学術交流システムの構築と応用」の支援によるものである。

(<http://dontaku.csce.kyushu-u.ac.jp/rcks/> 参照)

このような舞台を得て企画された本シンポジウムの内容は、東アジアにおける両国産業の連携を摸索するものであった。中国のWTO加盟に伴い近年、中国経済の動向が注目されているが、日本の産業は次々と中国へ拠点を移し、国内産業は空洞化しつつある。また、中国からの農産物の流入は、日本農業を脅かすものとなっている。しかしこのような中国の脅威は、ひとり日本だけのものではない。おとなりの韓国は中国経済の自由化に、より強い関心を抱いている。韓国は日本に比べて、まだまだ製造業の比重が高く、製造業を中心とする中国の産業発展は脅威である。加えて、中国農産物の大量輸入によって韓国農村は、日本よりも一足早く混乱を経験した。

中国経済発展の下で日韓両国の産業は生き残りを模索している。

そして、このような東アジアの経済情勢を背景に、両国は今、手をつなごうとしている。それが日韓自由貿易協定の協議でもある。両国は歴史的な日韓関係のわだかまりから、このような交渉の開始には時間がかかると言われていた。しかし東アジア経済情勢の急変が両国を、交渉のテーブルにつかせることになった。日韓の経済連携は、中国経済発展の下での、両国産業の生き残りをかけたものとなり、日韓自由貿易協定には大きな期待がかけられている。

中国経済発展の下での日韓連携は、史上かつて無い試みともいえる。東アジアにおいて、日韓両国が手を携えることができれば、両国産業の未来は拓かれるかもしれない。本シンポジウムでの熱のこもった講演と討論が、まさに日韓産業連携への幕開けを予感させるものとなった。あわせて九州大学韓国研究センターが、アジア研究の拠点たることを実感させる国際シンポジウムであったことを御報告しておく。



2日 程

日時 2002年11月9日(土) 14:00~17:00

場所 九州大学国際ホール(福岡市東区箱崎6丁目10-1 九州大学箱崎キャンパス)

## I 挨拶

- ①梶山 千里 九州大学 総長
- ②石川 捷治 九州大学 韓国研究センター長
- ③小此木 政夫 現代韓国朝鮮学会 会長(慶応大学法学部 教授)

## II プレゼンテーション

荒木 啓二郎 九州大学 システム情報科学研究院 教授

「先端的インターネット技術を用いた日韓学術交流システム」

## III 基調講演

①深川 由起子 青山学院大学 経済学部助教授

「日韓経済緊密化構想の実現への課題:東アジア経済連携の基軸を求めて」

②梶島 達也 農林水産省 貿易・情報室長

「自由貿易協定を巡る最近の状況と日韓FTA共同研究会」

③大貫 義昭 三井物産株式会社顧問・日本経団連日韓産業協力検討会座長

「日韓FTAに向けたわが国経済界の対応」

## IV シンポジウム

討論司会 深川 博史 九州大学経済学研究院 助教授

コメンテータ ①朴 珍道 九州大学訪問教授 忠南大学校経商大学 教授

②金 良姫 韓国対外経済政策研究院 副研究委員 日本研究チーム長  
(金良姫氏はソウルよりインターネット中継画面で参加)

## V 閉会の辞

稲葉 継雄 九州大学人間環境学研究院 教授

■主 催:RCKS九州大学韓国研究センター<URL <http://rcks.isc.kyushu-u.ac.jp>>

■共 催:●現代韓国朝鮮学会

●九州大学研究拠点形成プロジェクト

「先端的インターネット技術を用いた日韓学術交流システムの構築と応用」

■後 援:韓国国際交流財団

## ③ 講演者・コメンテータ紹介

### 講演者

深川 由起子 早稲田大学政治経済学部卒業、米国Yale大学大学院、早稲田大学大学院。日本貿易振興会(JETRO)、長銀総合研究所主任研究員を経て、1998年より青山学院経済学部助教授、2000年より経済産業研究所Faculty Fellowを兼任。

梶島 達也 東京大学農学部卒業。大臣官房企画室、調査課、日本貿易振興会ニューヨーク、経済局国際協力課、総合食料局国際調整課国際調整官、等を経て、現在、農林水産省 総合食料局国際調整課 貿易・情報室長。

大貫 義昭 東京大学法学部卒業。三井物産 化成品部長、三井物産 ソウル支店長、欧州三井物産 社長。三井物産 専務取締役、三井物産 代表取締役 副社長、等を経て、現在、三井物産 顧問。

### コメンテータ

朴 珍道 ソウル大学校卒業、東京大学大学院 経済学研究科(経済学博士)。現在、忠南大学校 経商大学教授(九州大学訪問教授)。韓国社会経済学会 副会長、韓国農業政策学会 副会長、韓国農林部 通商交渉委員、農政諮問委員。

金 良姫 世宗大学校卒業。東京大学大学院 経済学研究科(経済学博士)。英国Univ.of Bradford 客員研究員、三星経済研究所 首席研究員、を経て、現在 対外経済政策研究院 副研究委員、日本研究チーム長。

# 皮膚科教室における 韓国との交流

古江 増隆  
九州大学医学部皮膚科教授



日本皮膚科学会と韓国皮膚科学会との交流は深く、昭和54年に第1回日韓合同皮膚科学会がソウルで、開催され、その後1年ごとに交互に日本と韓国において合同皮膚科学会が開催されている。第2回日韓合同皮膚科学会は昭和56年に福岡で当教室の古部治邦名誉教授が開催されている。その時、「日本人によって記載された皮膚疾患」の特別講演として故樋口謙太郎名誉教授が、今でも問題になっているカネミ油症の講演をされているのは興味深い。当教室ではその後も毎回学会には演題を出し参加している。また、堀嘉昭前教授の時には韓国からの研究生を受け入れ、真菌の研究に従事してもらったこともある。

今回、本年1月25日の福岡でのアトピー性皮膚炎治療研究会第8回シンポジウム開催（会長：古江増隆）を機に慶北大学の免疫学のKim Jung-Chul教授と皮膚科学のKim Do-Won教授を招き、講演をして頂いた。Kim Jung-Chul教授は免疫学の教授であるばかりか、植毛センターの所長でもあり、「Clinical and basic advances of hair transplantation and research」という演題で植毛の基礎的研究と実際的な実施方法について解説して頂いた。講演の後で、植毛の実演をなさり、その際に、自分の下肢に髪の毛を植毛しているのを皆に見せられ、驚かせるというユニークな面も覗かされた。当教室でも今後1つの方向として美容外科にも力を注ぐ構想があり、Kim Jung-Chul教授の植毛の技術は得るものが多く、技術修得のために、近い将来、当教室の医師を慶北大学に派遣することも検討している。

皮膚科のKim Do-Won教授にはアトピー性皮膚炎治療研究会第8回シンポジウムの特別講演として「Skin barrier function and atopic dermatitis」という演題名で皮膚の防御機構に関わる構造、因子について、ま



たアトピー性皮膚炎ではそれらがどのように変化しているかについて分かりやすく概説して頂いた。本研究会は皮膚科のみでなく、小児科、基礎医学の研究者、企業の参加者も多く、また今回は「Evidence-based medicine」をテーマにとりあげ、より良い治療を患者に提供できるように努めており、Kim Do-Won教授の講演はそのための基礎的知識の充足に多くの聴衆の役にたったと思われる。今回を機に益々期待されるのは、両国の研究者との密接な情報交換である。また、今年、第13回の日韓合同皮膚科学会が韓国の大田で10月に開催される予定であり、今回も当教室から多数参加するつもりである。



# 先進的IT技術を用いた 将来の日韓 国際交流への挑戦



平成15年2月10日から17日に、ITWeekというイベントを九州電力グループなどと協力して九州大学でも開催しましたので、その報告をしたいと思います。ITWeekとは、ひとことでは、将来実用化され普及されるであろうIT技術を使った日本と韓国との国際交流がどのようなものになるか、今の時代にデモンストレーションしようという実証実験です。多くの方は政府が進めているe-Japan計画というのを聞いたことがあると思いますが、ITWeekはその中のe!プロジェクトというe-Japan計画が完了した時、国民の生活が進化したIT社会においてどのようになっているか先取りしようというプロジェクトの中の一つの活動でもあります。

ITWeekはその名前の通り、約1週間、日替わりで、さまざまな日韓の遠隔交流に関するイベントを行ないました。10日、17日には、筆者が担当している九州大学大学院システム情報科学府の講義の一つである分散システム特論という講義を、韓国ソウルにある漢陽大学と遠隔で実施しました。11日には九州大学医学部とやはり漢陽大学医学部の間で内視鏡の専門医同士のディスカッション、また、日韓自動翻訳を利用して看護婦さん同士の交流も行なわれました。これらの大学院の講義、それから、医学部の先生の交流には、デジタルビデオカメラの映像、音声をそのままインターネット上に流すことのできる装置を使いましたので、本当にインターネットで遠隔にやっているのか疑ってしまうような内容でした。その時の写真を本稿でもいくつか掲載しておきますが、事実、漢陽大学医学部の先生は映像を御覧になりながら何度も現地のスタッフに「これは本当に日本からの映像か。となりの部屋にいるんじゃないのか。」と繰り返し質問されていたそうです。なお、イベント中は常に九大から韓国へ30Mbps～100Mbpsのトラフィックが流れていましたが、これは通常九州大学全体がSI-NETと通信している帯域の数十倍の量になります。12日



以降は、福岡県の指導の下で企業や福岡市の中学校、また、専門学校がそれぞれ韓国の相手と交流しました。

詳細は、ITWeekのホームページ<http://itwee.info>を御覧になられれば、と思います。

さて、ITWeekを実施したネットワークの環境を少し技術的にも説明しますと、まずそのインフラには玄海プロジェクトが運用する1Gbpsのスピードを持った玄海研究インターネットを利用しました。玄海プロジェクトについては、以前、韓国研究センターのニュースレターで紹介されていますので、詳細はそちらを御覧になられればと思います。この玄海研究インターネットは、平成15年1月から利用が可能になり、九州大学も情報基盤センターで、1Gbpsの速度で接続されています。ちなみに、現在はKITEによって、九州大学内のすべての主要な建屋はギガビット級の速度で情報基盤センターに接続されているので、実は九州大学のどこからも韓国の主要な研究機関にはすでに1Gbpsの速度でつながっていることとなります。そのため、九州大学医学部からはKITEを経由して情報基盤センターまで接続してこの玄海研究インターネットに接続していましたが、全く問題なく大容量のデータ通信を行なうことができました。

e!プロジェクトや玄海研究インターネットは平成14年度から3年計画で行われますので、韓国の研究機関までの高速インターネットはあと2年は継続して使うことができます。今後もITWeekは継続して企画する予定ですし、学内でも日韓で共同プロジェクトなど計画している部局などありましたら、是非参加されてみてはと思います。



## 『朝鮮半島から九州大学に学ぶ』

九州大学韓国研究センター長

石川

捷治



本書は九州大学韓国研究センターが平成13年度(2001年度)の事業の一環として間接経費(全学的な共通経費)により実施した、1911年(九州帝国大学創立)から1965年(日韓国交正常化)までの時期における九州大学在籍の韓国・朝鮮人学生(朝鮮半島から九州大学への留学生)に関する第一次調査の報告書です。九州大学は、2010年に創立100周年を迎えます(前身の京都帝国大学福岡医科大学は1903年に開校)。本学は創立期より、アジアに対して学問的な目を向け、多くの留学生・研究者等を受け入れ、アジアにおける中核的な研究拠点としての役割を担ってきました。とくに、地理的にも近く、歴史的に関連の深い朝鮮半島地域から多くの学生(留学生)が九州大学に学びました。しかし、その実態については、戦後の断絶もあって、必ずしも明らかではありませんでした。今回の調査は、聞き取り調査・アンケート調査をもとに、朝鮮半島地域からの留学生の足跡をたどり、帰国後の韓国社会における卒業生の活動を明らかにすることを目的としています。

朝鮮半島からの留学生第1号は、官費留学生として1910年(明治43年)9月に、京都帝国大学福岡医科大学に入学した、金台鎮氏です。1921年までは3名と少なかったものの、1925年以降増加しました。戦前・戦中に九州帝国大学で学んだ韓国・朝鮮人学生(留学生)の卒業生数は162名、戦後から1965年まで九州大学(1951年の学制改革で旧制九州大学は、新制九州大学となった)では、40名、総数は暫定的ですが、258名(卒業202名、中退・入学取消・および学部不明計56名)であることが判明しました。

調査においては、在韓国九州大学同窓会の辛東韶会長はじめ、多くの同窓会の方々のご協力を得ることができました。同窓会皆様の志の高さと母校への熱い思いが、この調査を一気に進展させたといっても過言ではありません。この第一次報告をきっかけとして、さらにさらに充実した調査を進めてまいります。

報告書の刊行はさまざまな分野で反響を呼び起こしていますが、とくに本学の名誉教授の先生方からご在職中の留学生に関する情報や思い出をお寄せいただきました。現在、本センターは、改訂版の編集とともに、1965年以降の調査に取り組んでいます。今後とも宜しくお願い申し上げます。

## 目次

はじめに 九州大学韓国研究センター長 石川 捷治

## I 調査の概要 石川 捷治

1. 調査の対象と方法について
2. 当時の学生生活について
3. 九州大学卒業生の韓国社会における活躍
4. その他
  - 旧帝国大学におけるアジア人留学生像
  - 九州帝国大学初期朝鮮人留学生の追跡調査をもとに— 高 仁淑

## II インタビュー

- 3月 2日(崔 虎鎮・金 鍾台・柳 駿・尹 塘・辛 東韶の各氏)  
 3月16日(沈 鍾燮・安 守漢・辛 東韶・鄭 東孝の各氏)  
 3月17日(崔 虎鎮氏)  
 在韩国九州大学同窓会を訪ねて 黒木 彬文

## III 資料

- 各学部学科の同窓会誌・機関誌等からの資料  
 祖国の諸先輩の足跡を追って 金 鉉喜  
 先輩の足跡を追って 田上 美弥子

## IV 名簿

1. 卒業年度順
  2. 学部別
- 今回の調査に関わって 伊地知 敬子



梨花女子大言語教育院にて

# 夏の語学研修

2002年度

九州大学工学部1年  
道家 弘毅

僕は一年生の夏休みに、韓国の梨花女子大学校で行われる韓国語学研修に参加した。7月28日から8月21日までの約3週間、梨大の寄宿舎で生活しながら、同大の言語教育院で韓国人の先生方から授業を受けることができた。梨大に着いた翌日にクラス分けテスト(筆記と面接)を受け、その翌日にクラスが発表されて授業が始まった。時間帯は朝9時から午後1時までの4時間で、その後はフリータイムとなる。土日には授業はない。僕のクラスは15人くらいだった。日本人が一番多かったが、他にもスイス、香港、中国の人がいた。他のクラスも考えると、本当に世界中いろいろな国の人々が研修を受けに来ていた。高校生もいた。一番初級のクラスだったので、授業はハングルの発音から入った。

九大で講義を受けていたおかげで授業ではそんなには苦勞しなかったが、一緒に出歩いていた同じ九大の先輩方が食堂に入って普通に注文したり、知り合った人たちと韓国語を交えながら話をしたりするのを見て、簡単な挨拶さえも知らない自分があまりにも準備不足だったことを後悔した。そんな中先輩方は、ただ机に向かって勉強しようとする僕をいろいろなところに連れて行ってくださった。そのたびごとに僕はいろいろな韓国語を教えていただき、実際に何度も何度も繰り返して使うことで覚えていった。韓国の人に韓国語で話しかけ、意味が通じて笑顔とともに反応が返ってくる。そんなことが積み重なって、単なる記号だったハングルを「言葉」として感じられるようになっていった。

1時に授業が終わるとあとは自由時間だが、この時間にはだいたい梨大の近くで食事をしてから地下鉄でどこかに行く、というのがほとんどだった。地下鉄は値段が60円くらいと安く、いろいろなところまで伸びているので本当に便利だ。景福宮や西大門刑務所などの史跡も見に行ったり、これは研修の一環であるが「ナンタ」の公演を見たり民俗村を見学して回ったりもした。また、九大の先輩のなかには韓国人の知り合い

がいる方もいて、一度はソウル大テコンド一部の練習に参加させてもらったり、別の先輩の友人と食事に行ったりもした。その人たちとは今でもメールやチャットなどをして交流を続けている。また、土日は一日中空いているので、とにかくどこかに出かけた。



ソウル大テコンド一部にて

板門店ツアーに参加したときは、緊張した雰囲気の中でそれまで知っているようでは知らなかった韓国の分断国家という側面をのぞくことができたし、8月15日には戦争記念館に行き、日本にいるときはまた違う「終戦記念日」を過ごした。また、大田(テジョン)のワールドカップスタジアムでのサッカーの観戦に行ったとき知り合った韓国の友人とは、その後も何度か会って遊びに行った。この人たちとも、メールなどで交流を続けている。他にも本当にたくさんの経験をさせていただいたが、その中で何度



キムチ作りにも挑戦

も韓国人の持つ温かさに触れることができた。これは食堂に入ったとき、道を歩いているとき、遊びに行くとき、いつも感じた。あの雰囲気は、本当に羨ましい。韓国を好きになったのも、そんな名前も知らない人々のおかげなのかもしれない。

2002年度の韓国語学研修は、僕を変えた。生きた韓国語を学ぶことができたということもあるが、そのことを通して、もっと多くの大切なことを教えてくれた。これからも、もっと多くの人に韓国のよさを知って欲しい。

## 2002年度語学研修生一覧

首藤 かおり	文学部3年	
青木 智恵	比較社会文化学府	修士課程1年
北島 由紀子	比較社会文化学府	博士後期1年
井出 未央	経済学部3年	
道家 弘毅	工学部1年	
行正 桂静	教育学部2年	
倉持 智子	法学部2年	
水江 朱里	法学部2年	
田端 祐理	経済学部2年	
入口 真也	経済学部2年	
中島 千晴	経済学部2年	
田口 香菜子	21世紀プログラム2年	
大山 和郎	農学部2年	
岡本 知恵	農学部2年	
尾崎 理恵	農学部2年	

# 研究室だより

比較社会文化研究学府博士課程 西野 玄



「韓国言語文化研究」表紙

松原ゼミは、九州大学比較社会文化研究学府の一講座です。比較社会文化研究学府が、“学際”を掲げていることもあって、松原ゼミを構成する院生の研究分野も多種多様—大まかにわければ言語・文学・民俗学・歴史学—です。このことは、松原ゼミが主体となって、2001年7月より発行している『韓国言語文化研究』の目次からもこのことを窺い知ることはできると思います。そして、“韓国”というキーワードがこの混沌をつなぎあわせています。

ゼミの授業は、(1)院生の研究発表、(2)論文講読、(3)史料講読の三つで構成されています。院生の研究発表は、どの院ゼミにも見られるものですが、全く異なる分野の発表を聞くことが、松原ゼミの特長といえます。同じ人文科学系であるにもかかわらず、発表を聞くと、分野ごとに発表のスタイルや議論の前提が異なることが、よく分かります。授業では、先生が司会をつとめ、院生は必ず一回以上、質問しなければならぬことになっています。

専攻分野が異なる仲間からの質問の中には、些末な質問が飛び交うこともあります。しかし、時に、他分野からの視点は、発表者が思いもしなかったような指摘を生み、そこから議論が深まっていくこともしばしばあります。また、専門知識を持たない人へ向けての発表には、“分かりやすく発表する”ということを発表者に、自覚させ、それは同時に、変化の契機、その前提という研究の大枠を明確に示すトレーニングにもなっています。そして、このようなゼミを成り立たせる大切な要素は、松原先生の名司会にあります。



「松原孝俊教授と修士2年のゼミ生」

## 「韓国言語文化研究」既刊号目次

### 創刊号2001年7月

創刊によせて 松原 孝俊

#### 論文

開港期初期、外務省の居留地設置政策  
～釜山居留地の設置から仁川開港まで～ 西野 玄

#### 資料

日本語の複合動詞に対応する韓国語 李 恩慶

### 第2号2002年7月

#### 論文

釜山市立図書館略史(1910年～1938年を中心に) 松原 孝俊

#### 資料

韓国語基本動詞データ — 形態数を中心に 米田 幸代  
1945年以前の吉林省朝鮮族学校 松原 孝俊 監修・金 珽美 翻訳  
大邱広域市立図書館所蔵日本古典籍目録 松原 孝俊

### 第3号2002年11月

#### 論文

朝鮮プロテスタント伝道における  
ハングル聖書翻訳と聖書頒布の始まり 阿形 佐恵子1970年代、韓国における「伝統文化」と「近代化」の関わり方  
— 江陵端午祭の事例から — 申 鎬국어사전의 용언(동사) 의의분류와 그 제시 방법에 대한 고찰  
— 『표준국어대사전』을 검토 대상으로 하여 — 米田 幸代

#### 資料

朝鮮神話に関する研究目録 北島 由紀子

去年、2002年はワールドカップ、それも韓国と日本、二つの国で史上初の同時開催が実現された年であった。そして、個人的には二回目の日本行きが決まった年でもあった。だけど、最初とは違って、二回目の日本生活はそんなに簡単ではなかった。この世の中には、いい人ばかりではなく、自分はやっぱりまだ子供であることを認めなければならなかった。だけど、色々な辛い経験の中から私は少しでも成長できたのであろう。そして、その思い出の真ん中に、この2002年ワールドカップがある。

私は熱烈なサッカーファンではない。サッカーのルールも良く知らないし、観戦したこともない。海外で育ったという経験があったせいか、そこまで自分が韓国人であることを意識していなかったし、正直な話、普通の韓国人と比べて、“愛国心”というのを持っていない人間である。しかし、九大の韓国研究センターで応援していた私を見た人はきっと、“あの子、凄いね!”と驚いたのだろう。集団的心理ではなく、本気になって応援したことには、誰よりも自分自身が一番ビックリした。新聞に自分に変わった顔が写っているのを見てから、やっと気付くことが出来た。こんな顔をして応援していたのだ…と。

多分私がそこまで応援できたのは、“奇跡”が見たかったからのではないかと思う。初めてワールドカップの試合を見たのは、小学校の頃、韓国に帰国してまだなれていなかった時期であった。学校の授業はもちろん、全てにすぐなれなかった私は、あまりにも辛くてその時期のことをよく覚えていない。だけど、鮮明に覚えている唯一のことが、教室のテレビから流れていたワールドカップの生中継だった。なぜ、それしか覚えていないか未だに不思議に思っているけどその時私は初めて韓国人たちの応援ぶりを見て、“これが韓国だ”と実感した。だけど、試合は負け。決勝には出たけど、韓国代表チームは、一回も勝つことが出来なかった。



於:九州大学韓国研究センター

それが残念で泣いているクラスメイトたちを私ははっきり覚えている。

それから、私は心のどこかでずっと、一回でもいいから、格好良く勝ってほしいと思いつけていた。だけど、現実はそんなに簡単に勝利を許してくれなかった。10年近くになって、やっとその勝利を目にすることが出来たことに私は感激のあまり、興奮してしまったのだろう。

一番、印象に残っているシーンは、ホン・ミョンボ選手が最後のPKゴールを決めた時である。小学生の頃から一番好きな選手で、ずっと見続けていたけれど、そんなに明るい笑顔を見たのは初めてであった。プレッシャーが大きいPKゴールを決め、勝利したことも嬉しかったけど、次々世界

の最強チームを倒し、ベスト4まで行ったのは…夢みたいなことであった。そして、単純に勝利で終わらず、やれば出来るという自信を皆に取り戻してくれた、素晴らしいワールドカップだったと思う。特に、一番辛い時期を過ごしていた私に、ワールドカップは思い切り笑って叫ぶことが出来た時間で、一生その感動は消えないと思う。

そんなに遅い人間ではないが、自分の生き方で自分なりの人生を生きようと思うよう

になった。ただのスポーツ試合なのに、こんなにも大きな影響を与えたことがまだ私は信じられない。何よりも楽しくて嬉しかったのは、日本人と韓国人と一緒に応援をしたことである。それによって、国を離れている留学生たちがどれほど励まされたのか、それは多分日本の方々には想像も出来ないだろう。普通の試合観戦とは全然違う、何か胸をいっぱいにするモノがそこにはあった。

最初反対の声が少なくなかった同時開催だったが、お互いを素直に接することが出来たと思う。やっぱりどこの国よりも韓国と日本はお互い似ている所が多いし、長い歴史の中で戦争よりは交流の歴史がもっと長かったことを両国は忘れてはいけない。これからもっと努力しなければならないが、今よりはきっと良い関係になることを私は信じたい。何よりも、一緒に応援してくださった石川先生、岡元由香さんに感謝したいと思う。色々な方々のお陰で、ソウルで応援できなかった寂しさは、一瞬で消えてしまった。2002年夏はとても大切な思い出になったと、何年経っても私は言い続けるような気がする。



## ワールドカップ 観戦記

### 2002年 ワールドカップの思い出



特別聴講学生  
金 知炫  
(キン・ジヒョン)



## 『経学隊仗』の旅から

— 崔致遠とその子孫たちを訪ねて —

大学院人文科学研究院 柴田 篤

それは、さりげない出逢いから始まった。2001年春、九州大学P&P助成による「崔致遠撰『桂苑筆耕集』の総合的研究」の第一回研究会の席上。統一新羅時代に唐に渡り官僚となり、後に帰国して韓国現存最古の詩文集『桂苑筆耕集』を編んだ人物、崔致遠(856~?)。その程度の知識しかなかった私の前に、一冊の本が回覧されてきた。崔致遠著『経学隊仗』と読めた。パラパラとめくって、びっくりした。儒教經典に見える諸概念についての筆記であるが、明らかに朱子学成立以後のものに見えた。朱子は南宋、12世紀の人。9世紀に生きた崔致遠の文章とはとても思えない。これが長い不思議な旅の始まりだった。



西岳書院版『経学隊仗』

今日、崔致遠著とされる『経学隊仗』は、18世紀に第23世の後孫である崔致徳(1699~1770)が発見、書写して代々受け継がれ、20世紀初頭に崔致遠を祀っている慶州の西岳書院で木版印刷されたものである。しかし、崔致遠の著ということについては既に研究者の間で疑問視されてきた。実は明代初期の中国で作られた書物を朝鮮で再刻したものの内容と概ね重なるという研究もある。その本はソウルの成均館大学校に現存するという。



西岳書院

一年が過ぎた頃、慶州在住で九州大学に訪問研究員として来られた郭大基教授の協力で新たな情報が得られた。崔致遠ゆかりの遺跡の現状。その子孫による社団法人慶州崔氏大宗会の存在。そして最近崔氏の手によって出版された『経学隊仗』の現代語訳注本。機は熟した。2002年10月、紅葉間近の慶州に入った。そこで目にしたのは、今も族譜(大同譜)編纂に専心する年輩の人々の姿であった。族譜、それは一族の家系図であり、世代の交替(30年)毎に編纂される。祖先を顕彰し、自己の源流を確認する作業である。新たな祖先の発見もある。子孫がこれを受け継いでいくこと、そのための教育を怠ってはいない、と彼らは自信をもって応えた。西岳書院で『経学隊仗』が刊行された時期、それは正に族

譜編纂と重なる。1927年、昭和2年のことである。『経学隊仗』の謎が少し見えてきた。この書は祖先と子孫を結び、先祖の誇りと自分たちの尊厳を確認するためのものであったのか。

一ヶ月後、初冬のソウルへ飛んだ。成均館大学校で件の書物を閲覧する。なるほど内容は重なるが、違いも見逃せない。国立中央図書館で西岳書院版と、他の活字本も目にした。市内の書店で、これまた偶然に最新版の現代語訳本も購入する。道徳的荒廃を救うための祖先の遺産として、この書は繰り返し世に出されるのだ。資料は揃った。後はこれらをどうまとめるかだ。そんなことを考えていた矢先、郭教授からニュースが入る。西岳書院版の版木と、更に崔致徳が書写した原本の所在が分かった、と。私の胸は高鳴った。

2003年新春早々、再び慶州へ。遂に私は、崔致遠著として初めて公刊されたその書の版木を目にした。そして、その「原本」をこの手に持った。崔致徳の手抄本、西岳書院版、そして明人の作とされる『経学隊仗』。それらの内容は複雑に絡んでいた。謎は逆に深まった。その足で、崔致徳がかつて講学を行った従吾亭・龜山書社を訪ねあてる。庭園の池には厚い氷が張っていた。奥に位置する進徳廟(祠堂)に行く。閉まっていた。近所の家に声をかける。古蹟を守る媪が重そうな鍵束を持って現れる。入り口がようやく開く。崔致徳の位牌の前に立つ。木の覆いを取る。不思議な思いに包まれた。この人から始まった崔致遠著『経学隊仗』。謎は解けないが、何かが伝わってきた。真実が二つあってもおかしくはない。三礼をして祠堂を後にした。

翌日、釜山市海雲臺の椿島にある崔致遠像に足を運ぶ。海雲とは崔致遠の別号。ここを訪れたという。思いの外、堂々たる像であった。遠く海の彼方を見つめる姿が胸に迫



崔致遠像

てきた。思えば一冊の本との出逢いから始まった旅であった。そこから多くの出逢いが生まれた。過去から現在に繋がる一族の絆。一冊の書物の運命。書院や古蹟を守る人々。様々な思いが胸を去来した。長い旅はひとまず終わった。しかし、また新たな旅が始まりそうな気もする。



## PROFILE

柴田 篤 (しばた あつし)

1952年大分市生まれ。  
1974年九州大学文学部卒業。  
1977年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。  
同大学助手、福岡教育大学教育学部講師、助教授、九州大学文学部助教授、教授を経て現在、九州大学大学院人文科学研究院教授。  
専攻: 中国近世思想史  
著書: 『叢書・日本の思想家 中村惕斎』(明德出版社)  
論文: 『明末天主教の靈魂観』(『東方学』76)、  
『李退溪と「白鹿洞書院揭示」』(『哲学年報』61)など。



# 『市場開放下の韓国農業』

—農地問題と環境農業への取り組み—

(九州大学出版会 2002年9月)

深川 博史

本書では、90年代の市場開放下における韓国農業について、農地問題を中心に検討している。90年代の韓国農業は、ウルグアイ・ラウンド農業交渉の妥結を受けて、農産物市場の開放を迫られることとなった。90年代前半には米以外の作物について市場開放が進められるとともに、米市場の開放に備えて農業構造改善の事業が開始された。

韓国農業は、日本に比べて、専業農家が多く、稲作への依存度が高いという特徴を持つ。農家所得の農業所得依存度、農業所得の稲作所得への依存度がともに高く、稲作農業の行方が農家の将来を左右している。兼業農家が大多数を占める日本農業とは類似性を持ちつつも、多くの点で異なっており、同じ条件下で米市場が開放された場合には、日本に比べてその影響は格段に大きいと予想される。よって、米市場の開放に備えた、稲作農業の競争力育成策にも相当なエネルギーが投じられた。

稲作農業の構造改善に際しては、農地問題の解決が鍵となる。従来の韓国農業は、農地が分散し、経営規模が零細であるという特徴を有した。日本と同じく、分散錯圃制と零細小農体制の下で、生産性の向上は大きく制約されていた。このような体制の下で、生産性の向上を図るには、農地の集団化を進め、比較的耕地規模の大きい経営体の育成が求められるが、そのためには、稲作機械化一貫体系の整備や、担い手農民の成長が必要となるばかりでなく、農地の流動化が避けられない。

しかし、この農地の流動化を巡る状況は、日本とは大きく異なっていた。韓国では全体農地に占める賃貸借農地の面積が大きく、農村集落では不在地主の関わる賃貸借が広く行なわれている。農地の流動化にあたっては農地所有者の協力が必要となるが、不在地主の協力を得ることは容易ではなかった。50年代の農地改革後に、その成果を維持するための農地法が定められなかった韓国では、都市化とともに、不在地主の所有農地が増加し、農地の流動化は困難となっていた。加えて、高齢化の進展に伴い、高齢の農民が農村に滞留し、在村地主の所有農地についても流動化の速度が低下していた。そして、

これら流動化の停滞状況を背景に、90年代の構造改善事業は困難に直面した。本書では、そういう韓国農村の構造問題を検討し、構造政策の変遷を描いている。

## 目次

序章 問題関心と課題の設定

第1章 WTO体制下の国際農業政策と韓国農政の方向

第2章 賃貸借をめぐる農地政策の転換

第3章 農地賃貸借関係と長期賃貸借推進事業の評価  
—稲作平坦部4ヵ村における賃貸借関係—

第4章 農業機械化事業と賃貸借関係

第5章 構造政策の制度的枠組み —農業振興地域制度の導入を巡って—

第6章 開発制限区域制度と農業経営

第7章 土地所有と環境農業の対抗

—八堂ダム周辺の上水源保護区域を事例として—

終章 市場開放下の韓国農業

韓国語要約・図表一覧・文献一覧・索引 (xii+406頁)

## 主要論文

「韓国のガット・ウルグアイラウンド対策」

(九州大学『韓国経済研究』第1巻第1号2001年)

「韓国の土地所有と『親環境農業』政策」

(日本経済政策学会編『21世紀日本の再生と制度転換』勁草書房2001年)

「韓国のグリーンベルト —転用規制と環境保全の試み—」

(日本経済政策学会編『政策危機の構図』勁草書房2000年)

「韓国の土地利用と開発制限区域制度」

(『アジア都市研究』第1巻第3号2000年)、など。



## PROFILE

深川 博史

(ふかがわ ひろし)

1958年 佐賀県生まれ

1982年 九州大学経済学部卒業

1984年 九州大学大学院経済学研究所修士課程修了

1987年 九州大学大学院経済学研究所博士課程単位取得

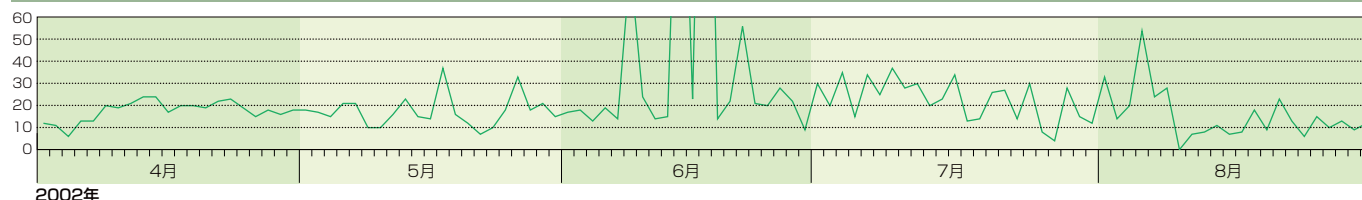
九州大学経済学部助手、教養部講師、助教授を経て、

現在、九州大学経済学研究院助教授、博士(経済学)。

# 韓国研究センター関係の会議等及び主な来訪者 2002年1月～2002年12月

年	月	日	視察、会議、催し等
2002	1	18	CSPA授業(日本との対外関係) —駐福岡韓国総領事館領事による公開講義
		23	韓国研究センター委員会(書面回議)
		28	韓国海洋大学校 朴 容燮 総長他1名視察
	2	1	釜慶大学校 姜 南周 総長他3名来所、 センター専門委員と意見交換
		18	嶺南大学校 Chang Hyeun Wook 薬学大学長他2名来所
		19	高麗大学校韓国学教育研修団 九州地域研修チーム来所、 専門委員と意見交換
		21	韓国研究センター設置準備委員会
	28	28	独立行政法人 国立公文書館 アジア歴史資料センター 高川定義センター次長他3名来所、 専門委員と意見交換
		28	韓国研究センター設置準備委員会
	3	8	韓国研究センター設置準備委員会
		20	韓国研究センター専門委員会
	4	2	江原大学校 朴 龍壽 総長他2名視察
		4	Brock University Robert Nunn 教授他1名見学
		8	カルフォルニア州立ポリテクニク大学ポモナ校 ボブ・H・スズキ学長他1名視察
		16	2002年度韓国国際交流財団 韓国研究奨学金助成事業受給希望者面接 慶北大学校見学
	6	ワールドカップサッカー日韓学生による合同応援会	
	5	17	フランスリベラシオン紙日本特派員 Richard Werly 氏他2名訪問
		20	JICA(歯学コース)研修生見学
		28	2002年度韓国国際交流財団 韓国語学研修事業参加希望者面接
		5	釜山大学校 14名見学
	7	16	韓国研究センター専門委員会 韓国研究センター委員会
		19	福岡大学 熊木 勉 助教授見学
		23	中央大学校 金均 一 教授見学
		31	2002年度韓国国際交流財団 韓国語学研修事業参加者説明会
	8	8	麗水大学校 金 河準 学長他2名視察
		20	巨済大学校 見学
		22	ワールドカップサッカー日韓学生 合同応援会参加者による日韓学生座談会
		26	韓国研究センターシンポジウム実行委員会
	9 10		増改築工事
	11	5	韓国研究センター専門委員会
6		駐日本国大韓民国大使館 趙 世衡 特命全権大使他4名視察	
9		第2回国際シンポジウム開催	
11		韓国研究センター委員会	
12	13	コリアファンデーション 李 仁浩 理事長視察	
	27	東亜大学校 金 泰亨 氏見学	

来館者指数グラフ



# 韓国研究センターに寄贈された韓国研究図書リスト 2002年度

## 1) 韓国地理風俗誌叢書

第一次(1~100)『朝鮮地誌』他 景仁文化社  
 第二次(101~200)『韓国地理』他  
 第三次(201~300)『朝鮮八道誌』他

## 2) 年鑑類

한국상품연감 2001	한국상품연구소
보도사진연감 2001	한국사진기자회
정보통신연감 2001	전자신문사
연합연감 2002	연합통신
한국교육연감 2002	한국교육신문사
문예연감 2001	한국문화예술진흥원
韓国出版年鑑 2001	大韓出版文化協會
韓国食品年鑑 2001	農水畜産新聞社
韓国統計年鑑 2001/2002	大韓統計協會
韓国年鑑 2001	韓国年鑑社
韓国農業年鑑 2001	農水畜産新聞社
鐵鋼年鑑 2001	한국철강신문
司法年鑑 2001	
國際統計年鑑 2002	
한희총람 2001	
韓國企業總覽 2001	

## 3) 白書類

統一白書 2001  
 外交白書 2001  
 情報通信白書 2001

## 4) 統計類

韓國의 社会指標 2001	統計廳
韓国統計調査現況 2002	統計廳統計協會
死亡原因統計年報 2001	
地域統計年報 2001	
人口動態統計年報 2001	
經濟活動人口年報 2001	
都市家計年報 2001	
物價年報 2001	
地域經濟動向 2002	
將來家口推計 2002	
統計目錄 2002	
産業生産年報 2001	
機械受注統計年報 2000/2001	
全國住民登録人口統計 2001	
市道別將來人口推計 2002	
韓国30大財閥財務分析 2001	新産業研究院
韓国主要經濟指標抄집판 2001	經濟企画院
農家經濟統計 2001	
漁家經濟統計 2001	
農産物生産費統計 2001	
農産生産年報 2001	

## 5) 報告書類

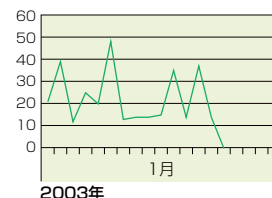
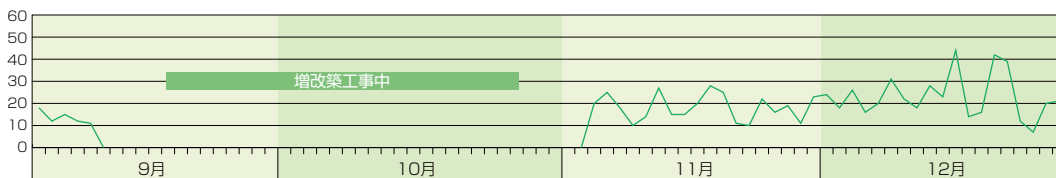
社会統計調査報告書 2001  
 情報化実態調査報告書 2001  
 統計利用実態및需要調査結果 2002  
 家口消費実態調査報告書 2000  
 穀物消費量調査報告書 2001  
 農業基本統計調査報告書 2001  
 漁業基本統計調査報告書 2001  
 農漁業法人私業體統計調査報告書 2001

## 6) 法典、法令類

法典 2002 玄岩社  
 稅法 2002 法・令・規則・通則/参照式 玄岩社



ソウル大学校寄贈図書



# Information

## ご投稿ください!

ニュースレターでは、できるかぎり幅広い広報を行うため、さまざまなコーナーを設け、皆様のご投稿をお待ちしています。

### 研究紹介

韓国・日韓関係にまつわる領域研究のもとでえられた具体的な研究成果を紹介します。また、韓国研究センターが支援する各種事業の成果の報告、諸分野の研究手法や研究の背景、内外で発表された優れた研究を紹介するコーナーです。

### インタビュー

座談会やインタビューで、研究者の素顔をご紹介したいと思います。

### 研究ノート

“科学者のひとりごと” “研究に関して日頃思っていること” “韓国との出会い” 等々お寄せください。

### その他

関連する学会・研究会・シンポジウムの案内、近著紹介、等につきましても掲載いたしますので、随時お知らせください。

### センター利用案内

開館時間 / 10:00～17:00

九州大学韓国研究センターでは下記のホームページ URL で事業紹介を行っています。

<http://rcks.isc.kyushu-u.ac.jp/>



### ■最寄りの交通機関

- JR博多駅→地下鉄中州川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前又は貝塚下車
- 福岡空港→地下鉄中州川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前又は貝塚下車

### バスのりば

- 天神14番のりば No.1、59、61、161の「九大前」行き、「月見町」行き→九大前下車
- 天神郵便局前のりば No.21～27→九大北門下車
- 博多駅1番のりば No.29→九大北門下車

九州大学韓国研究センター News Letter Vol.3  
編集発行 九州大学韓国研究センター 2003年3月20日

問い合わせ先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
TEL:092-642-4358 FAX:092-642-4359  
E-mail:rcks.uok@mbox.kyushu-u.ac.jp